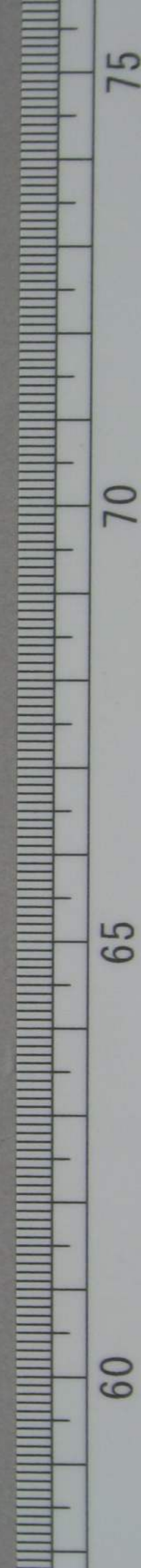


威

漢



60

65

70

75





感 涙

○あなかしこ

のぼる朝日の本つ國
すめらみことの御位は
國のまづめの富士の嶺を
うらおもてなき麗はしさ
我君即位ましくて
世々の功勳おしひろめ

萬々居士 作

神の定めし法として
千秋萬歳に限なし
見よや八面玲瓏に
萬邦仰がぬものぞなき
維新中興ことあがり
萬機親裁したまへり

文恬武嬉の御代なれば
王化四海に及ぼして
二十七年夏のころ
揖とる君も疲れはて
我君あわれし思し食し
力あはせて救へんと
もとより平和を旨として
安からしめん其外は
何ぞ圖らん清國の

祥瑞いたらぬ隈もなく
懐ぬ者ころ無かりけり
朝鮮海は波たちて
民何やふしと聞えけり
いかでか見すて給ふべき
清の君にぞ諮ひたまふ
唯彼國の君民を
何御心のおはすべき
君のかねての盟にも

背きて軍艦よそひつゝ
英武の我君いかよして
弱を凌ぐ清國を
やがて御旗を廣島に
軍機軍略すべて皆
かねて股肱と頼むごと
實に大御身とおぼしめす
ある日ひそかに兵卒の
風ふきすさぶ大庭を

海づら掩ひて推よせぬ
忍ばせたまいん暴を以て
膺ち懲せよと詔たまふ
進めたまひて御身つから
謀らせたまふ尊とさよ
詔せたまへる兵士をば
大御心ぞ畏こかる
まとへる服を召させられ
しばし歩ませ給ひけり

鴨緑河に張りつめし
虎臥す野邊に野營する
あはれ兵士よいたはしと
四千万人たれかまた
將校士卒は然なきだよ
唯國のため君のため
況してや斯る大君の
譽れに添へて荷ひつゝ
いつ戦ひて勝たざらん

氷渡りて行軍し
兵士の寒さ如何ならん
のたまはするを漏聞ける
涙こぼさぬ者やある
家をも身をも打わすれ
力盡すぞ頼もしき
大御恵と大御稜威
進みよ進む勇まじき
いづこを攻めて取ざらん

金遼山東すべて皆
敵はさながら酔ひるごと
軍器軍艦さゝけつゝ
清の君臣今は早や
始めて盟よ背きしを
滿清一の元勳と
古稀にあまれる老の腰
地を割き軍費あがなひて
不便よおほし更にまた

御旗なびかぬ隈も無し
守をすて遁けまどひ
降服するも多かりき
支へ難きを知りしかば
悔の八千たび悔よけり
名よ聞えたる李鴻章
屈めて來つる哀れさよ
和睦を請ふを我君の
盟たてさせ容されぬ

國の光の朝日てる
高き富士の嶺いや高く
あを畏こしや大君の
國內のみかゝ外國に
嗚呼かしこしや嗚呼かしこ

○あなうれし

國と云ふ國多かれど
併せて廣き清國に
民と云ふ民多かれど

御旗の色に輝やきて
國の鎮めの彌や堅し
大御惠よ大御稜威
及ぼしゝころ畏こけれ

滿漢蒙古西藏を
まさされる國はあらぬ也
世界の人の三つ一つ

ありと聞ゆる清國の
國土の廣し民多し
旅順威海の要害も
我が日の本は東海よ
其國民も清國の
世界の文明聞き知りて
交り結び初めたるは
されば心得なきもの
屬邦なりと思ふさへ

民より多きは有ぬなり
富さへさすが豊なり
世界に稀れと稱せらる
離れて立てる一孤島
十分一に過ぎぬなり
港を開き外國よ
三十餘年に過ぎぬなり
我が日の本を清國の
有りと聞よ悲しきよ

然るに這回朝鮮の
暴を制して膺ち懲らす
海には艦撞煙たて
咄喊の聲百雷の
さすがは要害堅固なる
原野を過ぐるが如くよて
敵の命と頼みたる
艦隊すべて捧げつゝ
陸よは左寶貴打死し

弱きを扶け清國の
仁義の軍ぞ勇ましき
陸よは貔貅雲のごと
轟き落るゝ異ならず
旅順威海も人のなき
忽ち占領したりけり
丁汝昌さへ北洋の
降伏せしこそ悲しけれ
つゞいて宋慶吳大徵

防守の術も盡きはて、
遂に數々使たて
二億の軍費償ひて
之を聞きもし見もしつる
我を忘れて日の本の
其は右に左に新たにぞ
臺灣諸島よ日の丸の
斯くて凱旋したまへる
嬉しさ何に譬ふべき

退ぞく外に道も無し
土地を献じて罪を謝し
和を請たるぞ哀れなる
歐米諸國の驚きは
萬歳うたはぬ者ぞ無き
領地となれる澎湖島
御旗かゞやく麗はしさ
君の御輦拜みたる
心ことばも及べれず

あなかしこしや是れぞ皆
我が大君の御威稜こそ
然は然りながら海陸の
將校士卒の功勳も
御國開けて三千歳よ
めでたき御代は未たしも
此大御代は遭ひよし
思へば嬉しき身にあまり
嬉しや嬉し嗚呼嬉し

叡聖文武におはします
四海は普ねき驗なれ
軍務に仕へたてまつる
古今に類なかりけり
近しといへど斯くばかり
曾つて聞かざる所なり
宿世いかなる縁しごと
涙にくれぬ者ぞなき

○あなかなし

天の時さへ地の利さへ
いよ、這回の戦ひよ
浪風荒き海原や
果し知られぬ野末よ
頃しも金を蕩かすと
拭きあへぬ間に雪ふき
されど將卒一致して
命をしまぬ益荒男よ

人の和するよ如かずとは
其驗こそ顯はるれ
岩角高き嶺こえて
岸邊はるけく水流る
云へる熱さの汗をさへ
膚を冒す苦しきよ
御國の爲めよ君のため
勝るゝもの何あらん

敵もさすがに命懸け
暑さ寒さを頼みよて
打出す矢玉雨のごと
我軍隊は其中を
弾に中りてつく息の
喇叭の聲の尙ほ止まず
身は血に染みて臥ながら
君の萬歳となへつゝ
土さへ裂くる夏の日

嶮しき嶺や堅き城
防ぎ守るが健氣なる
煙は空へ見えわかず
進みよ進む勇まじさ
枯くなるに手にもてる
吹つゞけしも有とかや
苦しき聲を張りあけて
息たえたるも多かりき
日影をさふる茂みたに

あらぬ野中を進みゆく
雲さへ凍る冬の夜よ
あらぬ河邊に宿りぬる
心は金剛不壞なれど
銃さへけつゝ立ながら
瘴癘毒や疫疾に
齒がみなしつゝ斃れしも
かねて佛の御教に
明らかぬれば其人よ

暑けさ如何に有つらん
雪風をさふる木蔭だよ
寒けさ如何に有つらん
身は鐵石に非ざれば
凍死しも有りきとや
懼りて野戦病院に
少なからずと聞えけり
出離生死の道をさへ
心のこりは有らざらん

されど六師の凱陣がいじんは
幾千萬いくせんまんの其數そのかずは
かゝる人々ひとありてこそ
かゝる人々ひとなかりせば
生のこりたる人々ひとは
歡迎くわんげいうけて勇ましく
其れは引かへ尸骸しかばねを
藻屑もくずとなして歸り來ぬ
あはれ佛ほとけの御光みひかりを

勝鬨かちどきあけて旋り來る
漏れたる人の悲しさよ
此凱旋このがいせんも有りしなれ
如何いかも今の幸を見ん
到る處いたるところは國民こくたみの
其嬉そのうれしさは如何いかもぞや
荒野あれのは晒らし水底みぞの
其口そのくちをしさ如何いかならん
仰ぎて冥路やみち照らさずば

いかは忠魂ちゆうこんなればとて
救はせたまへ御佛みほとけと
御國みくにの爲めよ君きみの爲め
あはれ悲かなしくも嗚呼あな悲かなし

悲かなしくなるらん嗚呼あな悲かなし
願ねがふも頓やがて然さながらよ
諸人もろびと心こころおこしてよ

明治二十八年八月十四日印刷
 明治二十八年八月十八日發行

著述者 大内青巒
 東京麻布區日下窪町二番地

發行者 丹靈源
 東京々橋區加賀町十四番地

印刷者 北澤久次郎
 東京々橋區和泉町印刷所

發行所 國母社
 東京々橋區加賀町十四番地

版權
 所有

大内青巒居士著

◎ 佛教道ある軍

右は慈悲方便と六波羅密との二題に於て戦争と佛教との關係を論ひ。名將勇士の一首の今様長歌なれば高尙にして勇壯また優美にして通俗を唱へたる三首の盡忠報國の志士數百冊を購求し汎く施本の宏擧と爲し軍歌なりを鼓舞せられよ

◎ 戦争と佛教

會つて陸海の軍人に賜りし勅諭の精神に基つき佛教の眞理を發揚して佛敎の戦争に對する理想及び因縁の事實を明かに暢述し其説甚だ簡潔にして其文尤も平易なれば凡そ新聞雜誌を讀み得る程の人は誰にても之を解し得べければ或は之を汎く施本として國民軍の元氣を發揮せしめ或は之を以て演説若しくは説教の參考にして能く大乘佛教の國家に對する觀念行爲を詮顯することを得へし

◎ 六波羅密

本書は近衛師團有志將校の需に應し同居士が最も通俗的に演説せられたる筆記なり

一冊正價金三錢
 二冊迄郵税二錢
 一冊正價金三錢
 三冊迄郵税二錢